

ルーマニア出身のドイツ語作家ミュラーが1997年に出版した長編小説。彼女は2009年にノーベル文学賞を受賞している。

社会主義政権下のルーマニア。語り手の「私」はアルブ少佐のところに呼び出しを受けている。場所は国家公安局だろうか。「十時きっかり」に出頭するよう言われているが、呼ばれる頻度がこのところ増している。ルーマニアからの出国を試みた、というのが容疑の内容らしいが、アルブの言動は尋問というより、むしろ脅しに近い。ハンドバッグを置いてトイレに立つたところ、バッグのなかに切断された誰かの指が入れてあった。アルブの目的は相手を不安に陥れ、精神的に支配することなのか?

頭のなかで行きつ戻りつする時間と風景。そもそも彼女はアルブのところに着くまでの時間を引き

日経 2022.7.2

ヘルタ・ミュラー著

安住できない社会胸を苛む

伸ばしたくてたまらない。永遠に

彼女の過去を描いていく。

着かない方がいいのかもしれない。路面電車は不規則に停車し、

それでも、なんと希望のない日々なのだろう。夫の勤める工場で横行する盗み。ズボンや靴を

彼女は乗客と車掌のやりとりに耳を傾ける。眼前の光景のスケッチに加え、父のこと、最初の夫と義父のこと、現在の夫パウルのこと、

出国しようとして射殺された友人リリーのこと、さまざまな記憶の断片が蘇り、モザイク画のように

盗られて帰宅する夫。彼は、若くしてすでにアル中だ。社会には密告者が溢れ、信頼できる友人も隣人も

もいまはない。彼女には、自分らしい人生を送れる見込みもない。

八方ふさがりのなか、「狂いたく

ない」と思うのも無理はないのだ。

ふとカフカの『審判』を思い出

した。主人公ヨーゼフ・Kは、ある日告発を受ける。被告として法廷に引き出され、やがて死刑執行されるが、彼の罪状はよくわからぬままだ。生きていること、その社会の一員であることがすでに

「罪」の一部なのだろうか。

第2次世界大戦の前半、ソ連を

相手に戦った「バナート・シュヴィ

アーベン人」(ミュラーもその一

人)は、ルーマニアのマイノリテ

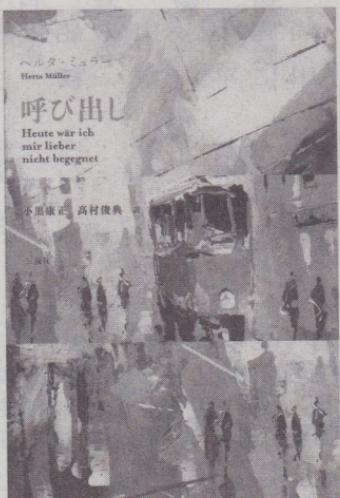
イーであるだけではなく、政治的

にも有罪の刻印を押された存在だ

ったのかもしれない。けつして安

住できない社会での孤立感、焦燥感、胸を苛む不安が、ミュラー

流の詩的な言葉で綴られている。



(小黒康正・高村俊典訳、三修社・3080円)

▼著者は53年ルーマニア生まれのドイツ語作家。邦訳書に『渾身』『狙われたキツネ』『心獣』など。

評) ドイツ文学者 松永 美穂